

5年1組

わたしのお米になっていく 米づくりへの挑戦① ～私たちは米づくりの「本当」にどれだけ出会えるだろうか～



今年度、私たち5年1組は学校の近くにある田んぼを「平成農園さん」にお借りして、お米作りに挑戦しています。私たちが毎日のように当たり前食べているお米。そのお米を育てる中で、どんな学びがあったのかを、いくつか紹介します。

★先生、宝石みたい… ～顕微鏡で見つめる粳～★

先日、平成農園さんが播種（種まきの作業）を行うということを知り、子どもたちと一緒にその様子を見学してきました。平成農園さんから帰ってきた後、Hさんは次のような振り返りを書きました。

「種はお米」ということが心に残りました。予想通りだったけど本当にただのお米でびっくりしました。

私は、Hさんの「予想通りだったけど本当にただのお米でびっくりしました」という言葉にとっても惹かれました。それは、このHさんの言葉から、「このお米から本当にお米ってできるのかなあ」という問いを感じたからです。「この一粒から一体お米はどんな風にできていくのか」そんなことをみんなと考えたくなった私は、次の日、子どもたちと一緒に種もみを見つめてみよう、コシヒカリ、キヌヒカリ、もりもりもち（もち米）の種もみを渡しました。子どもたちは、手にした種もみをじっと見つめていました。皮を丁寧に取り除き、中身を見て、うるち米ともち米の色の違いに気づく子もいました。中には味の違いを確かめようと、一粒一粒味わっている子もいました。そのうち、Yさんが双眼顕微鏡を理科室から持ってきてお米を見ようとしていました。しばらくすると「すごい！」という声が聞こえてきました。私が行ってみると、Kさんがその双眼顕微鏡をのぞいていました。Kさんはレンズをのぞきながら、とてもうれしそうな声で、「何これ、気持ち悪い！」とつぶやいていました。そのようにKさんが思わず口に出してしまうくらい、お米は拡大され、皮の表面がよく見えました。そのお米、は先ほどまで肉眼で見ていた時とはまるで違う姿を見せていたのです。またしばらくすると、今度はAさんが、「先生、むいてみたらつるつるしてる」と、先ほどのKさんも一緒に観察している場所に連れて行ってくれました。その時、Kさんは私に、ぼそっと「宝石みたい…」とつぶやきました。先ほどまで、「気持ち悪い！」と言っていたKさんでしたが、今度は光り輝く宝石の美しさをお米から感じているのです。おもしろいなあと思いつつながらレンズをのぞいてみると、Kさんの言っている意味がよくわかりました。レンズの先に見えたお米は、とても美しかったです。お米には見えませんでした。その綺麗さに、何度も「すごいすごい！」と言って子どもと一緒に興奮しました。この日は「種もみ」を見つめることで、今まで見ることのなかったお米の姿を見ることができてとてもうれしかったです。お米という、私たちにあって身近なものでも、こうして見つめてみると、こんなにも知らないことがあるんだと感動しました。そしてこの感動の中にも、「このお米からお米ができるのか」という問いを明らかにするヒントがあるような気がしています。「お米」を追究していくこと。今、その先にある魅力子どもたちと味わっていきたいと思っています。



★「私たちの田んぼを誇りに思う」～田んぼとの出会いそして手作業での田起こし～★

5月17日。私たちは初めて「田んぼ」と出会いました。嬉しさ、ワクワクと同時に、「こんな草だらけのこの田んぼから本当にお米が育つのだろうか」そんなことも感じた日でした。その日、自然と草を抜き始めるR君の姿がありました。そしてR君に続いて周りの子たちも草を抜き始めました。後々、「草は抜かなくてもいいんだ。肥料なんだ」と教えてもらった時は、「そうなんだ」とは思いましたが無駄なことをしたとは全く思いませんでした。なぜなら、そうして子どもたちが自分の田んぼに働きかけていってくれたことに価値があると思ったからです。

その日から始まった田起こし。「自分たちの手でやってみたい」と始めたのはいいものの、あまりにも手強すぎる相手でした。道具も、これまで触ったことはあるものの、実際に使ってみようとするとうまくいかないことばかりでした。思わず、道具を投げつけて田んぼの近くで遊びたくなってしまいう時もありました。それでも「働くからだ」はすごいものです。道具の使いかたをどんどん体が覚えていくと、これまでひっくり返らなかった土がひっくり返るようになりました。そんな時、決まって大きな掛け声がありました。1人では持ち上がらない土も、2人で協力すると持ち上がりました。自分たちなりの田起こしのやり方を、どんどんと開発し、広めていく子どもたちに、私は心強さを感じました。道具の使い方や特徴を子どもたちは体で覚えていったのです。

実習生と一緒に挑んだ沼地での田起こしは壮絶でした。実習生が用意してくれた道具もすぐに壊れてしまいました。沼にはまる足。もう一歩も動けない状況の中でもみんな助け合って田起こししたこともいい思い出です。





そして6月7日（火）ついに田起こしは終わりました。

Kさんの振り返りノートに書かれた「私たちの田んぼを見ると誇りに思ったりしました」という文章。Hさんの振り返りノートに描かれていた「輝く田んぼ」の絵。そんな子どもたちの振り返りノートを見ると、改めてこうして自分たちの精一杯を出してやり切ることができてよかったなぁと感じました。「力を合わせればこんなにできるんだ」ということや「道具ってこんな風に使うんだな」ということなど、いろんなことを体で感じる事ができた「田起こし作業」でした。

Before

After



★私のお米になっていく 米作りへの挑戦～田植えを通して～★

「私は、田植えて、人間でいう成人式だと思う」

田植えの前日の総合の時間、Hさんはこんなことを語り始めました。当初わたしは、この時間で、「苗を植える場所の目安となるヒモを作ろう」と構想していましたが、思わず、Hさんが何を語りたのか聞きたくなり、「どういうこと？」と聞いていました。するとHさんは次のようなことを話してくれました。

「これまでさ、苗って苗箱に入っていて狭そうだったでしょ。でも田植えをするってことは1本1本、みんなていたところから離れて育つってことだから、苗にとっては成人式をする感じなんだと思う」

Hさんの田植えに対する感性がとてもすてきだなと思いながら聞いていると、他の子たちも、自分にとっての田植えについて話を始めていきました。それは、まるでHさんの話から波紋のように広がっていくようでした。



後日、田植えを終えた子どもたちと2つの活動をしました。

1つは「書写」です。子どもたちと一緒に「成長」という字を書きました。それは、田植え前日の語り合の中でHさんが語った「成人式の話」とは別にMさんが、「自分も苗と一緒に成長していきたい」と語っていたのを思い出したからでした。書写の時間を終えた日、Sさんはこんな日記を書いてくれました。

『私と字とお米の成長（書写）』

書写の授業では、「成長」という字を書きました。私は、書写は、少し苦手です。その理由は、字が上手くかけないからです。だけど、今回書いた、「成長」という字は、お米に関わっています。お米が成長するにつれて、私達も成長するし、字も成長して行くから、頑張って書きました。もし違う字でも、本気でやるけど、「成長」という字は、お米との繋がりがあから頑張りました。私は、これからも、お米とともに成長していきたいです。

苦手な書写にも、積極的に取り組んだSさん。その背景には、Mさんと同じように「お米と一緒に成長していきたい」というSさんの思いがありました。そんな思いを感じながら、Sさんの書いた字を改めて見つめると、また一段と素晴らしく見えてきます。他の子たちの字にもSさんと同じように物語があるのだと思うと、さらに味のある字に見えてくるのが不思議です。

もう1つの活動は俳句です。「田植え」をテーマに書きました。「田植えの時の思い出の一番面を切りとって見たらどうかな」と子どもたちに伝え、子どもたちが書き始めると、面白いほど、その気持ちが伝わってきました。子どもたちは、十七音の中に、何とかして自分にとっての「あの瞬間」を詰め込みたいと願い、俳句を作っていました。

苗一本一本に自立してほしい、苗の成長と共に自分もそれに負けないように成長したい、という願いを込めて植えた「田植え」、そしてその思いを込めて書いた書写「成長」、さらに自分が忘れられない田植えの思い出を十七音に包み込んだ「俳句」、それらの活動は、つながりながら、一つの学びを作り上げていっているように感じました。

